
豆腐小娘 暢気便　～零咲森より、愛をこめて～

星里 天理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

豆腐小娘 暢気便 〱 零咲森より、愛をこめて〱

【Nコード】

N9038X

【作者名】

星里 天理

【あらすじ】

気が付くと、自分は、豆腐を持って、森の中で突っ立っていた

「どうにも、この森は、妖怪が集まりやすいらしいね」

謎の黒髪少女、印はそう言う。

豆腐小僧の？女版？とされる？豆腐小娘？である、記憶喪失（？）の新参妖怪、豆子 トウコ と、沢山の妖怪達との、零咲森での

（妖怪基準で）ごく普通の日常。

…こちらの小説は、自分のブログから引っ張り出して来た物です。
決して、無断転載とかじゃありませんので。

アタシ、誰？

むせ返る様な木の匂いがして、我に返った。

見渡してみると、木と、見た事の無い植物ばかりが、あちこちに生えている。

そういえば、アタシは、森の中にいたみたいだ。

じゃあ、アタシは、さっきまで、どこにいたわけ？

ずっと、ここにいたの？

頭の奥の記憶を引っ張り出そうにも、まるで霧がかかってしまったかのように、ぼんやりしていて、思い出せない。

アタシ、誰？

なんか視界が狭いと思っていたら、何故か、頭に大きな笠を被っていたようだ。

くい、と笠を持ち上げてみると、急に視界が開けたので、少し驚く。

自分の着ている物に、注目してみると。

とても、派手な柄　真っ赤な紅葉柄　の、着物を着ていた。
茶色の帯で、腰の辺りをキュッと締めている。着物と帯の色合いが、
とても綺麗。

ふと、地面を見下ろす。

そこには、苔だらけの、ジメジメした土の上に乗っている、自分の
足が見えた。

草臥れた、草鞋のような物を履いている。

よく見ると、足の指は、三本しか無かった。

それぞれの指は太く、どれも鋭い爪が生えている。

前までは、アタシの足の指は、確か五本くらいはあったような、無
かったような…

どうにも、思い出せない。

あれ。

アタシ、なにか、持ってる？

お盆を、持っている。

その、お盆の上には、真四角の、瑞々しい、

豆腐が、乗っていた。

「　　ちよつと、そのの、そのの　　」

急に声がしたので、慌てて豆腐から目を離し、声の主を探す。

「　ここだよ、ここ　　」

漸く、アタシの目が、その声の主を捉えた。

あれは、人間だ。

反射的に、そう思った。

夜空を切り取って貼り付けたような、真っ黒い髪の毛。
余りにも黒いので、少し怖くなった。

「　ちよつと、こっちへ来てごらん　　」

相変わらず、人間が、アタシに呼びかけてくる。
他にする事も無いから、素直に、人間に従った。

これから先、アタシの、自由でおかしくて気ままな私生活につき、
ご了承ください。

アタシ、誰？（後書き）

どうも、星里 天理という者です。
また新しい小説書いちゃいました。

…因みに、「豆腐小娘」なんてふざけた妖怪は、
いませんからね？
！……

私が勝手に考えたんですよ？！……
応援して下さいと嬉しいd（殴

あんた、豆腐小僧の親戚かなにか？

人間は、「印^{いん}」という名前らしい。

真っ黒な髪の毛は、とても短く、桜色のほつぺたの辺りまでしか伸びていない。

わざと、そうしてるのかな…

前髪は、真っ白なピンで留めてある。髪が黒いから、そのピンは、まるで光っているかのよう。

目は少し吊り上りぎみだけど、とても優しそうな光を帯びている。鼻筋もスツて通っていて…とっても綺麗な顔立ち。

この印という人間は、ホントに人間なのかな…？

そんな事を考えてると、ふいに、印は、こっちを向いて、言った。

「あ、そうそう、あんたは何？」

え…ええっ？ そんな、イキナリ「何？」って聞かれても、分からないよ…

こっちが聞きたいくらい…

「だよねえ、私も、普通の人よりはいろんな妖怪と接してるけど、あんたみたいなのは、見た事ないよ…」

そう言つて印は、困ったような顔になった。

…ん？ ん？ 今、妖怪って言わなかった？ アタシ、妖怪なのかな… 何故か、お豆腐持つてるけど…

ていうか、印は、「いろんな妖怪」と接してるの？ 人間なのにな…？ うーん、ますます「印」という人間が分からなくなってきた…

「あんた、豆腐小僧の親戚かなにか？」

…あのう、まず、「豆腐小僧」自体知らないんですけど…

「うっん、なんだろうねえ…あ、こちら辺かな？ …おい、月太ー？ いるんでしょー？！」

いきなり印が、大声を出すもんだから、少しびっくりする。

「印、『ゲッタ』って」

「ゲッタなら、おいらの事だよ。」

後ろから声がした。

振り向くと、大体、アタシと同じ背丈の、男の子　　かな？　　が立っていた。

男の子っぽいけど、人間じゃあないみたい。

少し大きめの頭には、とっても大きい、真っ黒な目が二つ。その目の中には、何か白いものが…

印の、要するに人間の目で言うと、その白いものは、黒目の部分に当たる　　のかな？

髪の毛も、割と長いみたいで、頭のとっぺんの辺りでキュッと結わえている。

鼻なんかは、申し訳程度に、真ん中にちょこんとあるだけだけど、口はこれまた大きく、鋭い歯が覗いている。…こ、怖いなあ。

「あ、そんな所にいたのか。」

印がそう言うと、その「ゲッタ」と呼ばれた男の子は、大きな目を三日月型にさせて、くすくすと笑う。

そして、アタシの方を向くと、こう言った。

「おいら、あまんじゃく天邪鬼の月太。げった　　月に、あの、太って書くの。」

「月太」くんかあ　なんていうか、素敵な名前。
…えーと、天邪鬼？だっけ。良く知らないけど、額に角が生えてるから、鬼の仲間？

「うん、そだよ。あんたの言うとおり。…嬉しいなあ、鬼って言うてくれた！久しぶりだよ、うふふ」

月太くんは、「鬼」と言われた事がそんなに嬉しかったのか、ここにこしながらその場でぴょんぴょんと跳ねている。
…何が、そんなに嬉しかったんだろう…

「いや、あのね　」

印が、アタシの近くまで来て、理由を教えてくれた。

「ほら、アイツ、角あるし目もあんなだから、確かに異形の物って目で分かるんだけどね、
形は人間に近いでしょう。」

うんうん、確かに。

「だからね、『鬼』でなくて、『小僧』に間違われやすいんだな、アイツ」

へーえ、なるほど、そういう訳か。　　なんか、可哀相…

「ねえ、改めて聞くけど、ここ、どこ？」

私の問いに、印と月太くんは、ほぼ同時にポンと手を打つ。
二人の顔には、「忘れてた！」という言葉が浮かんでるよ…

「ここはねえ、『零咲森』っていう森なんだよ！」

月太くんが、満面の笑みで答えてくれた。

笑顔は素敵な事だと思うけど、月太くんの笑顔は、ちょっと怖い…

「れ、れいぎき、もり？」

なんだか難しい名前だから、知らず知らずの内に繰り返していた。

「そ。漢数字の零って字に、『花が咲く』の咲く、んで、森って書いて、零咲森。

どーしてこんな名前なのかは、私も知らない。」

印が、丁寧に解説してくれた。

アタシの頭の中で、「零咲森」という単語が完成する。

「零咲森、零咲森…なんだかよく分からないけど、かっこいい名前だねえ」

うつとりしながらアタシが言つと、月太くんは、また笑顔になった。

「でしょ、でしょう。おいら、これから、あんたと仲良くやっていけそうだよ！」

楽しそうにそう言った後、月太くんはにわかにハッとした顔になる。そして、アタシに、おずおずと聞いた。

「そついや、あんた、何て種族なの？」

すっかり、その事を忘れてたよ。

なんて答えたらいいか、アタシがおろおろしていると、代わりに印が答えてくれた。

「まあまあ、まずは、とにかく、大樹様のところへ行こうじゃないの。大樹様なら、きっと分かるよ」

……またまた、訳の分からん単語が出てきたぞ……

あ、アタシ、一体どこへ連れて行かれるんだろっ……

あんだ、豆腐小僧の親戚かなにか？（後書き）

第二話投稿できました！

…うん、どうも私、人の顔とかを説明するのが苦手なようです…
誰か教えて下さい（泣）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9038x/>

豆腐小娘 暢気便 ～零咲森より、愛をこめて～

2011年11月12日08時31分発行